

神奈川県伊勢原・秦野地域の関東ロームの層序について

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

今年度のテーマは「層序」である。特に神奈川県西部にあたる伊勢原・秦野市域に焦点をあてた。この地域は、過去にも旧石器時代の調査事例は幾つかあるが、相模野台地における綾瀬市早川天神森遺跡のような指標となる層序の提示は稀有である。また、近年の新東名高速道路建設事業等の大規模開発に伴う発掘調査事例の増加に伴い県西部での「層序」の確立が急務となったため、本テーマを設定した。

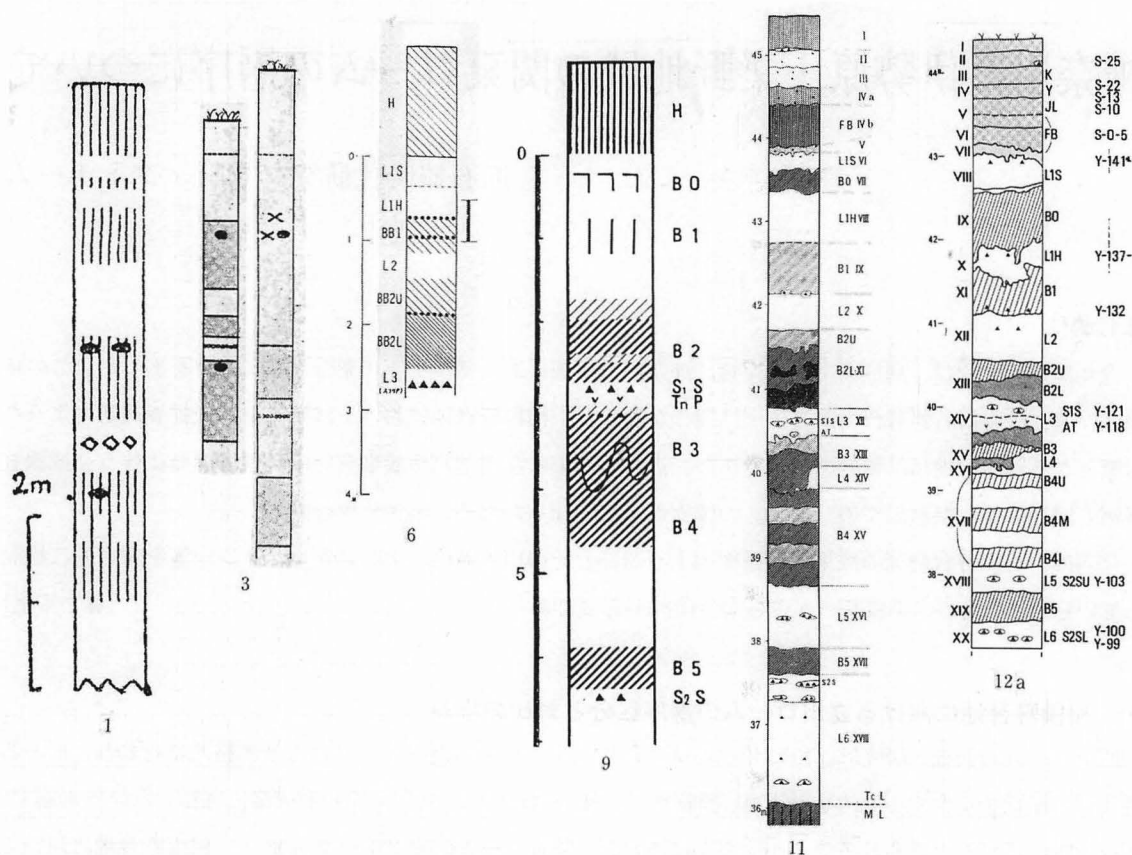
今回は、相模野台地等の成果と県西部出土石器群とその出土層位、テフクロノロジー等を総合的に検討しているが、今後の成果に基づきさらなる検討が必要であろう。(脇 幸生)

1. 相模野台地における立川ロームの層序区分と対比の歩み

関東ロームの調査・研究は、1953年に結成された関東ローム研究グループにより本格的に行われ、旧石器時代の石器群を包含する立川ロームは、標識地の武蔵野台地では、立川段丘の形成後に堆積したローム層で、2枚の暗色帯がみとめられることが明らかにされた(関東ローム研究グループ 1965)。相模野台地においては、戸谷 洋・貝塚爽平がローム層の柱状図(第1図1)を提示して多数の暗色帯が確認されること、暗色帯から円礫・角礫が出土し、それらが人類活動の痕跡であることを指摘した(戸谷・貝塚 1956)。

相模野台地での旧石器時代遺跡群の本格的な調査の開始は、岡本 勇・松沢亜生による遺跡分布調査であり、発見した42遺跡・53地点について、スコリア層(SIS)・暗色帯とともに遺物の出土層位を示した柱状図(第1図3)によって報告しているが、層序区分は行っていない(岡本・松沢 1965)。その後、相模考古学研究会が遺跡分布調査を行い、発見・確認した171遺跡・190地点について、遺物の出土層位をやはり柱状図によって報告している。柱状図では、スコリア層(SIS)とともに、暗色帯を上層から順に暗色帯0(B0), 1, 2, 3, ...と、その間のローム層1(L1), 2, 3, ...と区分し、L1を上層のソフト(S)と下層のハード(H)に、B2を黒味が薄くやや軟質の上層(U)と黒味が強く硬質の下層(L)に区分した(相模考古学研究会 1971)。また、相模考古学研究会の分布調査により発見された月見野遺跡群は、その直後に明治大学が発掘調査を実施しているが、相模考古学研究会による層序区分を採用しており(第1図6、明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団 1969)、この区分が相模野台地の標準的な層序区分となった。その後、B2L層やB4層の中間層の確認などにより層序の細分が行われ、また、広域テフラATの発見(町田・新井 1976)により他地域とのローム層の対比が容易に行われるようになった。さらに、1990年代になると、暗色帯や顕著なスコリア層だけではなく、スコリアを中心とした一次テフラを同定して層序に組み込むことにより他遺跡との詳細な層序対比を可能にした(第1図12a、かながわ考古学財団 1996他)。

なお、層序区分の細分や武蔵野台地との対比等の歩みについては、第1表にまとめた。(鈴木次郎)



第1図 相模野台地の層序図（柱状図の番号は第1表の番号と対応している、1の地点は古山の東方）

2. 相模野台地の層位区分について

相模野台地は、富士・箱根火山に近く、これらを起源とする火山灰の堆積が良好な地域である。このため、前項で鈴木が述べたように、古くからローム層区分の検討が行われてきた。武蔵野台地の野川遺跡と同様、ローム層を時間的空間的な基軸とした旧石器時代の編年研究において、本地域は常に一定の指標を提示してきた（矢島・鈴木 1976、鈴木・矢島 1978、諏訪 1988 など）。

相模野台地上におけるローム層は、前項あるいは各書で述べられているように、黄褐色ローム層と暗色帯とされる暗みの強い層が交互に堆積することが最大の特徴である。黄褐色ローム層はL1S・L1H・L2～L6層の7層、暗色帯はB0・B1～B5層の6層の計13層に区分される。層厚は、各遺跡の立地にもよるが、概ね最上位のL1S層上面から6～7mを測り、3～4m付近でATを含むL3層が確認される。同層位中、ATの直上には相模野第1スコリア（S1S）の存在も確認される。また、L5層とL6層中からは相模野第2スコリア（S2S）の存在も確認されている。

上記の様に相模野台地の層位は、主に層厚、上下隣接層との色調的差違、平面的な広がり等から広く時間の物差しとして有効であると認識されてきた。これらは紛れもない事実である。しかし、矢島・鈴木は、相模野台地最大の特徴である暗色帯が観察地点によっては黒味をほとんど帯びない地点の存在を指摘していたものの（矢島・鈴木 1976）、これは積極的には語られてこなかったのではないだろうか。本財団で相模野台地の調査に携わってみると、2つの重要な視点に気付く。

第1表 相模野台地の層序区分及び武蔵野台地との対比等の歩み

No.	調査年月	調査遺跡等	調査者(著者)	内容・特記事項
1	1952 夏	相模原市古山東方・下原東方	戸谷 洋・貝塚爽平	・2地点の柱状図を示し、多数の暗色帯が確認されることを記載。層序区分は行っていないが、B0・B1・B2L・S1S・B3・B4が読み取れる。 ・暗色帯(柱状図からB2L上面とB3中位と推定される)から円礫・角礫の出土を確認し、人類活動の痕跡と評価。 ・暗色帯は腐植によるもので、降灰休止期に形成されたかつての土壌(化石土壌)と説明。
2	1953.9 ～1965	関東各地の露頭調査	関東ローム研究グループ	・武蔵野台地では、立川・武蔵野ロームの境界はクラック帯をなし、立川ロームには、暗色帯が2枚存在する。 ・相模野台地では、2枚の明瞭なスコリア(S1S, S2S)がみとめられ、S1Sの上下に暗色帯がみとめられる。 ・相模野台地では、立川・武蔵野ロームの境界は明瞭ではないが、カンラン石の構成比からS1SとS2Sの間にある暗色帯の少し下と考えておく。
3	1960.3 ～1963	遺跡分布調査	岡本 勇・松沢亜生	・石器や礫が出土するローム層中に、上下2枚の暗色帯とその間のスコリア層を確認するが、層序区分は行っていない。 ・そのローム層の大半は立川ロームに、一部が武蔵野ロームに相当する。(『関東ローム』を引用)
4	1967.12 ～1971.3	遺跡分布調査	相模考古学研究会	・暗色帯以外のロームをL、暗色帯をBとし、上層から数字で表示して層序区分を行う。L1, B1, L2, B2, L3, B3, … ・L1を上層のソフト(S)と下層のハード(H)に区分、B2を黒味が薄くやや軟質の上層(B2U)と黒味が強く硬質の下層(B2L)に区分する。 ・B3中位～下底で土壌攪乱帯「波状」を確認。これを境に岩相が異なる。 ・1969年にB0を確認。
5	1969.2	論文(地理学評論)	貝塚爽平・森山昭雄	・相模野台地の田名原段丘・陽原段丘の細区分を行う。陽原望地面をビュルム氷期極相に形成された段丘とし、陽原海退を提唱。 ・「波状」を立川・武蔵野ロームの境界と捉え、B1とB2に相当する暗色帯を武蔵野台地の立川ローム上下の暗色帯に対比。
6	1968.9～10	月見野遺跡群第一次調査	明治大学	・1968年6月に相模考古学研究会が発見。層序区分は、相模考古学研究会の区分による。概報は、公表された層序区分の初出。 ・L1S～B2各層の層厚は調査地点により異なるが、ローム上面からS1Sまでのローム層全体の厚さはほぼ等しい。
7	1971.12	論文(第四紀研究)	町田 洋・鈴木正男・宮崎明子	・S1S直下の火山灰を丹沢パミス(TnP)と命名。武蔵野の暗色帯間の火山ガラスと同一であることから、B2とB3・B4を上下の暗色帯に対比。 ・相模野での立川・武蔵野ロームの境界は、S2S下約1mのクラック帯と推定。 ・暗色帯は、降灰休止期を示すものではなく、テフラの降下・堆積と腐植の集積が並行して形成されたと説明。
8	1971.8	小園前畑遺跡	相模考古学研究会	・L3中位のS1S直下から丹沢パミス(TnP)を確認。
9	1972.3 1973.3, 12	地藏坂遺跡	相模考古学研究会	・B2Lの中間に比較的明るい間層部を確認し、B2Lを3層に区分。 ・B3の上部を黒色味の薄い層として表示。
10	1976.6	論文(科学)	町田 洋・新井房夫	・丹沢パミス(TnP)を始良カルデラから噴出した火山灰と特定し、広域テフラの始良丹沢火山灰(AT)と命名。
11	1980.4 ～1981.2	早川天神森遺跡	神奈川県教育委員会	・L1Sが地点により硬いロームであることを確認。 ・B4の中に2枚の間層部を確認し、B4を5層に区分
12	1990.10 ～1994.9	吉岡遺跡群	かながわ考古学財団	・層序区分にテフラ層序(YNo)を併用。 ・S2SをS2SU(B4とB5の中間)と、S2SL(B5の下、従来のS2S)に捉え直す。
13	1994.4 ～1998.12	用田鳥居前遺跡	かながわ考古学財団	・B0を色調、縮まり、スコリア等から2層に分層。L2をスコリア含有量、粘性、縮まり等により上下2層に分層。

出典報告書・論文

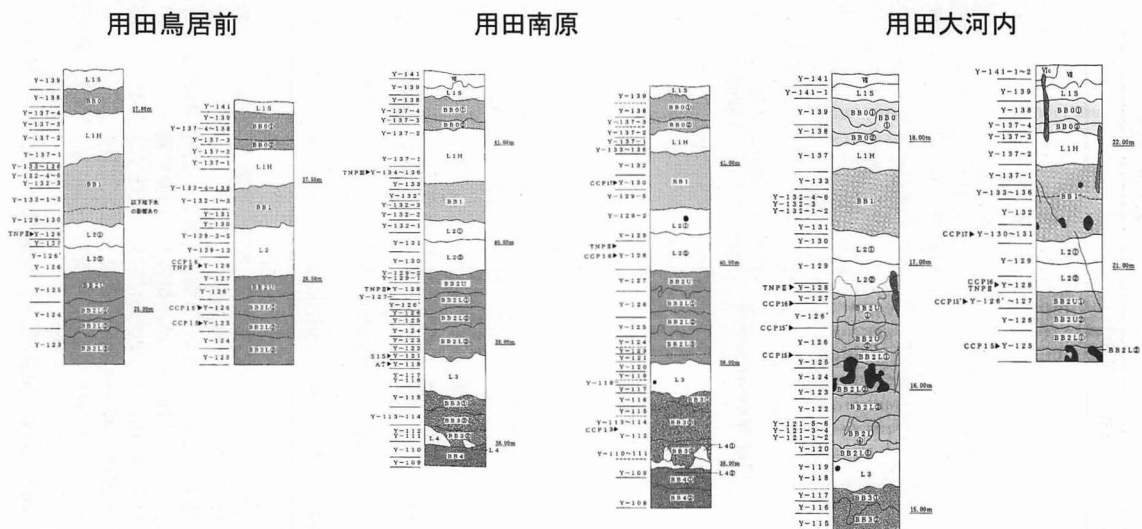
- 戸谷 洋・貝塚爽平 1956「関東ローム層中の化石土壌」地理学評論 29-6 pp.339-347
- 関東ローム研究グループ 1965『関東ローム』築地書館
- 岡本 勇・松沢亜生 1965「相模野台地におけるローム層内遺跡群の研究」物質文化 6 pp.1-14
- 相模考古学研究会 1971『先土器時代遺跡分布調査報告書ー相模野篇ー』
- 貝塚爽平・森山昭雄 1969「相模川沖積低地の地形と沖積層」地理学評論 42-2 pp.85-105
- 明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団 1969『概報 月見野遺跡群』
- 町田 洋・鈴木正男・宮崎明子 1971「南関東の立川、武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年」第四紀研究 10-4 pp.290-305
- 相模考古学研究会 1972『小園前畑遺跡発掘調査報告書』綾瀬町文化財調査報告 1
- 相模考古学研究会 1974『地藏坂遺跡発掘調査報告書』綾瀬町文化財調査報告 2
- 町田 洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰ー始良Tn火山灰の発見とその意義ー」科学 46-6 pp.339-347
- 神奈川県教育委員会 1983『早川天神森遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 3
- 12a (財)かながわ考古学財団 1996『吉岡遺跡群 I』かながわ考古学財団調査報告 6
- 12b 上杉 陽・上本進二・米沢 宏「神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群のテフラ層位」『吉岡遺跡群IX』かながわ考古学財団調査報告 49 pp.81-103
- 13 (財)かながわ考古学財団 2002『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告 128

1つ目は、やはり黒くない暗色帯が存在していること、2つ目は、上下の層界が必ずしも明確ではないということである。このような中、1970年代以降から今日に至るまで、発掘調査件数が増加する中、それ以前と比べてここまで統一的な視点で土層を観察することができていたのであろうか。各土層の層界には漸移的な部分が観察されることも多く、それを上層の下部とするのか、下層の上部とするのかという判断は、特に相模野台地の場合、出土遺物の印象を左右することとなる。大切なのは、どちらかに割り振るのかではなく、その様な層位の存在をきちんと報告していくことである。

近年、本台地のローム層にテフラ層序(Y-No.)を併記する取り組みも実施されている(上本・上杉 1996 ほか)。しかし、第2図の様に同一調査者が区分した考古学な層位であっても、テフラ層序との分析結果の間には、若干のズレが生じている。ここで大切なのは、このズレを考古学・地質学のどちらかの分析の誤りと押しつけ合うのではなく、この差違をどの様に受け止めるかと言う視点を見失わないことであろう。何故なら、前述の様な層界の不明瞭さゆえに、考古学側がこのズレを生じさせた可能性も十分考えられるからである。

相模野台地は、統一的な層位が厚く広く観察されるというローム層堆積の優等生的な地域と思われがちである。実際、暗色化していなくても「〇〇相当層」という視点からすると、広範囲に類似した層位を観察することができ、旧石器時代研究、とりわけ編年研究には大きな役割を果たしてきた。しかし、その反面、層界の漸移的な土層の存在は、詳細な土層の観察を滞らせ、相模野標準層序に当てはめる意識も生んでしまっただけではなかっただろうか。そのため、L1S・B1・B2層といった記載はあるものの、各土層説明の記述が乏しい報告書もある。大切なのは、土層の堆積が良好な地域であるからこそ、各遺跡でその特徴をきちんと報告していく姿勢が必要であり、これこそが相模野台地における旧石器時代調査者の使命でもある。

(栗原伸好)



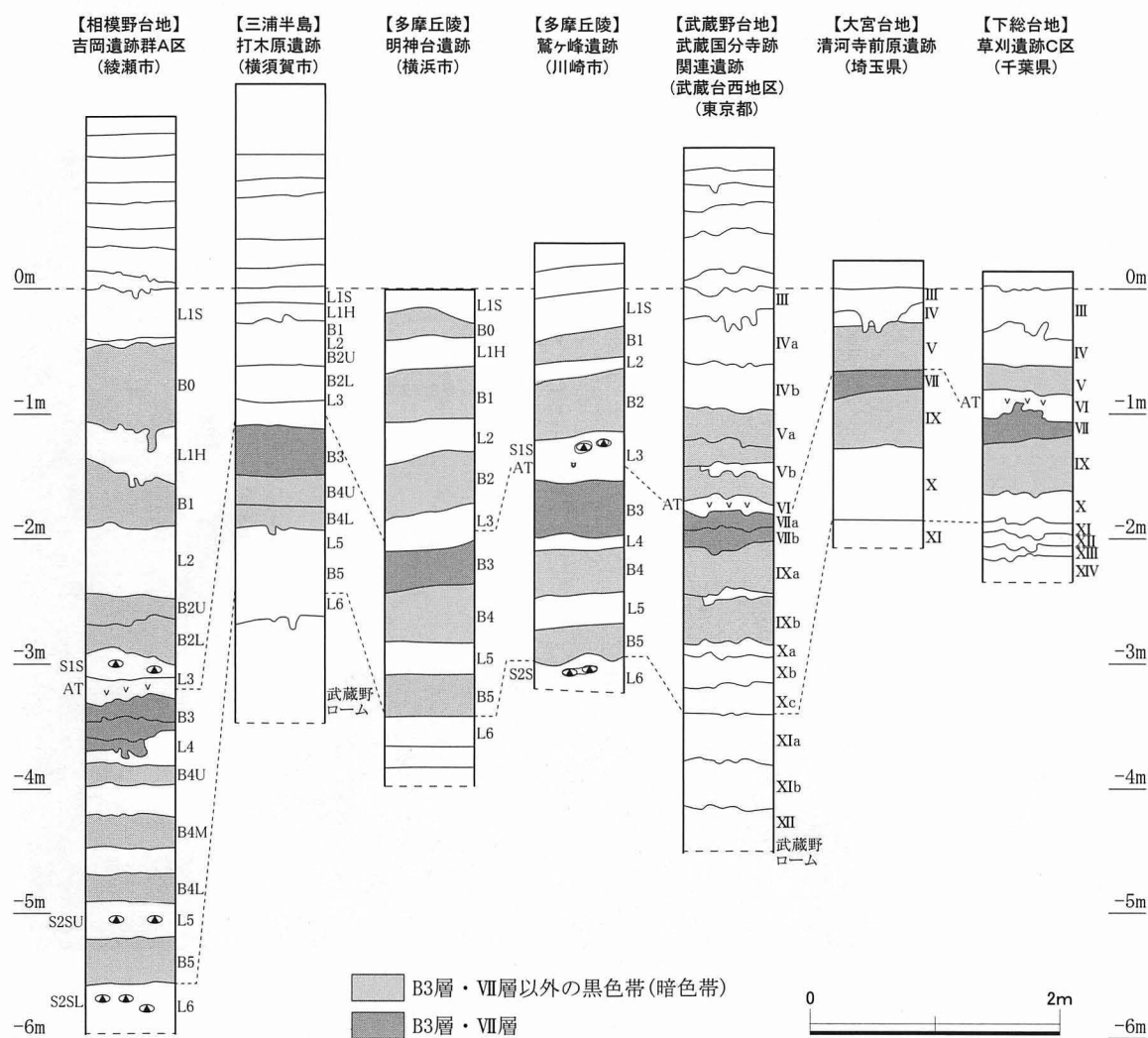
第2図 層序区分とテフラ層序

3. 相模野台地以東（三浦半島・多摩丘陵）の層序区分について

三浦半島の打木原遺跡ではATがL3層で確認されるが、S1S・S2Sが顕著に確認されない点は相模野台地以外の南関東のあり方と共通し、相模野台地との対比ではB3層以外のいずれの層も堆積が薄く、多摩丘陵との対比でもB3～B4層が同層厚で対比できる以外は堆積が薄い。また県外の南関東で同層序で対比できる立川ロームはB3層がⅦ（a・b）層よりも堆積が厚いが、L1S・L1H層がⅢ層と同層厚で、B4上（U）・B4下（L）層が大宮・下総台地のⅨ層と共通点が見出される。

多摩丘陵の明神台遺跡ではATがL3層で確認されるが、S1SとS2Sが確認されない点が相模野台地以東の南関東のあり方と共通し、B2・L3・B4・B5層が同丘陵の鷲ヶ峰遺跡、B3～B4層が三浦半島の打木原遺跡と同層厚対比できるとともに大宮・下総台地の層厚に近い傾向がうかがえる。鷲ヶ峰遺跡ではB4層を細分できない点が同丘陵の明神台遺跡と同層序対比できる大宮・下総台地のⅨ層、AT・S1SがL3層で確認できる点が相模野台地と同層厚で共通する点がうかがえる。

（井関文明）



第3図 相模野台地およびそれ以東の層序（立川ローム）〔中村 2014 を一部改変〕

4. 相模川以西の分層について

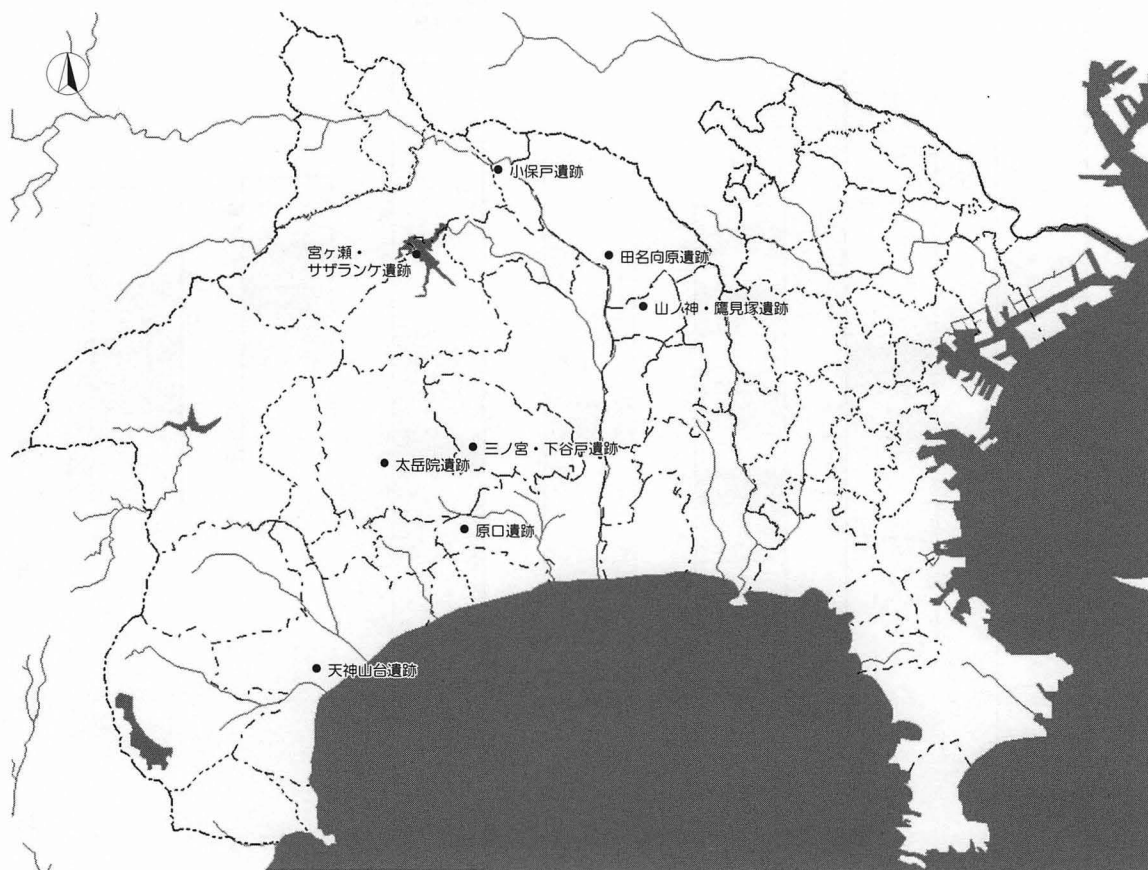
当該地域の調査事例は昨今急速に増大しているものの、長年調査研究されてきた相模野台地に対して未だ少数である。そして基本層序の堆積状況を概観すると、相模野台地に比し富士・箱根火山に近いことから、各層が非常に厚くなっていることがいえる。しかしながら相模野台地でもその南部と北部で堆積状況が異なるのと同様に、これまで観察されている各遺跡の基本層序にはその堆積状況に大きくばらつきが認められる。これは各地の地理的条件のほか、富士・箱根火山を吹き抜ける偏西風に起因する可能性が考えられる。

それぞれの層を見ていくと、全体に火山灰の粒子が相模野台地の火山灰に対し大きくなっていることや、相模野台地まで飛翔しない火山灰の存在が観察される。このことによりそれぞれの層に特徴的な「鍵」となるスコリアの特定が難しくなることで双方の層序対比が出来にくい状況が認められる。

そのためこれまでの調査では、相模野台地の層序と対比せず独自の層序番号を付与し、相模野台地の層序を参考として「相当層」として把握しようとしてきた。

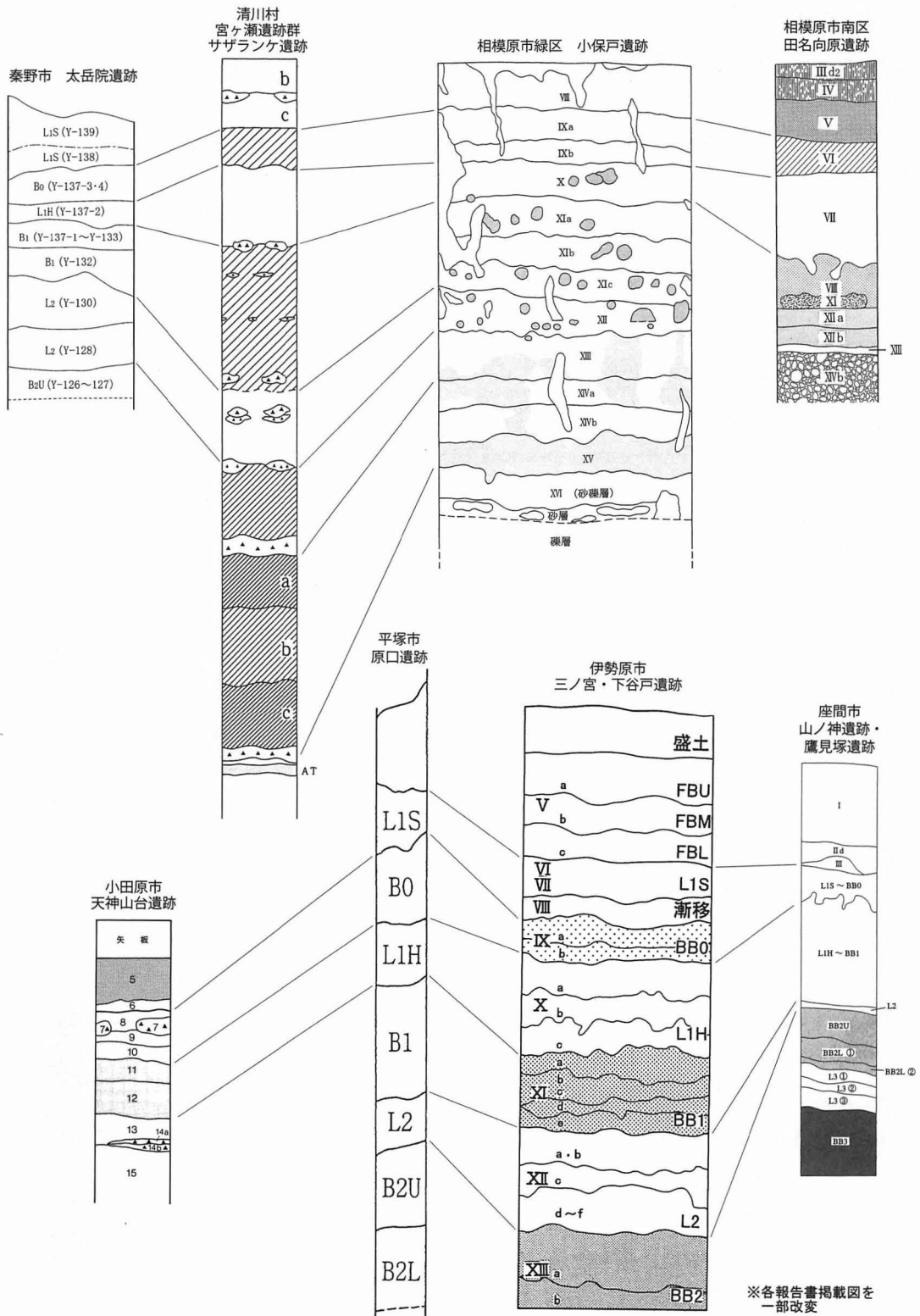
現在、伊勢原市から秦野市にかけて地理的に連続した調査事例の増大に伴い、精力的に堆積状況を観察し対比していく研究がすすめられている。

(大塚健一・加藤勝仁・三瓶裕司)



第4図 各柱状図の観察遺跡

神奈川県伊勢原・秦野地域の関東ロームの層序について



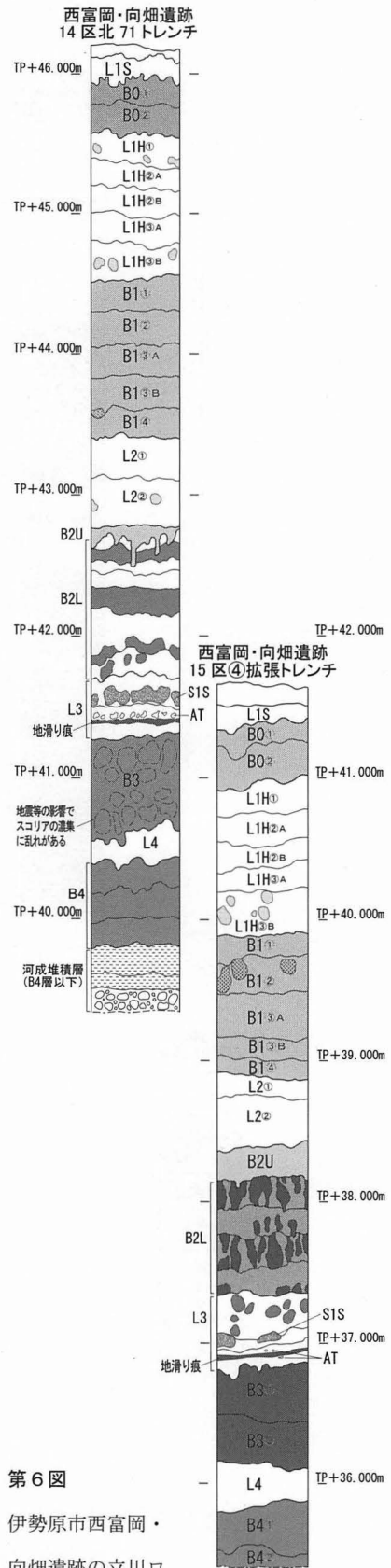
第5図 神奈川県西部を中心としたローム層層厚対比

5. 伊勢原市域のローム層序（西富岡・向畑遺跡）

県央部に位置する伊勢原市域は、相模川右岸に広がる相模平野の西端にあたり、北側は丹沢山地の大山南東麓から南北方向に延びる丘陵や扇状地が平野と接する。後述する西富岡遺跡は富岡丘陵の先端に形成された台地上に立地している。この一帯は活断層である伊勢原断層に沿った地域で、遺跡は丘陵先端の斜面地であることから、ローム層堆積の一部が地震による地滑りや褶曲・変形などの影響を受けている。遺跡内の2ヶ所で確認された地層の概要は以下の通りである。

ローム層上部のL1S層は堅くしまり、上位の漸移層との境界が波状に乱れる。径1～5mmの硬質の橙色スコリア（Y-138）を多量に含む。B0層は2層に細分され、上位の層相はL1S層と漸移的で、下位は暗色味が増す。L1H層はやや赤みがかった黄褐色ロームで、基本的の上（Y-137-3）・中（Y-137-2）・下（Y-137-1）の3層に細分されるが、厚く堆積した場所では中・下位の間にさらに2層に細分され、計5層となる。B1層は上層と比べて褐色味が優勢な黄褐色ロームで、①～④層に細分が可能である。B1①層は分層しづらいが、Y-137-1とB1②層（Y-132-6）に挟まれる。B1③層は大粒の黒褐色スコリアと細粒の凝灰岩片を多く含み、やや暗色味を帯びる。B1④層はY132-1の黒褐色スコリアが濃集する。B1③層は層相の変化で2層に細分可能な場所がある一方、堆積が薄く③・④層が1層に一括される場所がある。L2層の堆積は概して薄いが、本遺跡では上下2層に細分が可能な場合が多い。B2U層以下は地層のしまりが非常に強くなる。B2U層は淡い暗色を呈し、細粒の暗赤褐色スコリアとCCP15とみられる細粒の白色パミスを含む場合がある。B2L層は全体的に暗色がかかった褐色ローム層で、細粒の黒褐色スコリアの濃集層が間層を挟み、上（Y-123）・中（Y-124）・下（Y-125）のグループに分かれる。下位の黒褐色スコリアは風化が進み、ブロック状に混入する。L3層には中位にS1Sとみられる径5～15mmの黒褐～暗褐色の硬質スコリアが密集しており、その下位に乳白色粘土質火山灰のATが含まれる。ただし、県西部ではこのAT層準で地滑りによる横ずれ断層が広く認められ、ATはパッチ状に混入する。L3層以下は、地滑りによるスランプ堆積や渋田川水系の河川争奪などによる水成堆積層が認められ、層相の同時異相や側方変化が著しい。こうした詳細を検討するため、さらなる調査成果の蓄積が望まれる。

（絹川一徳）



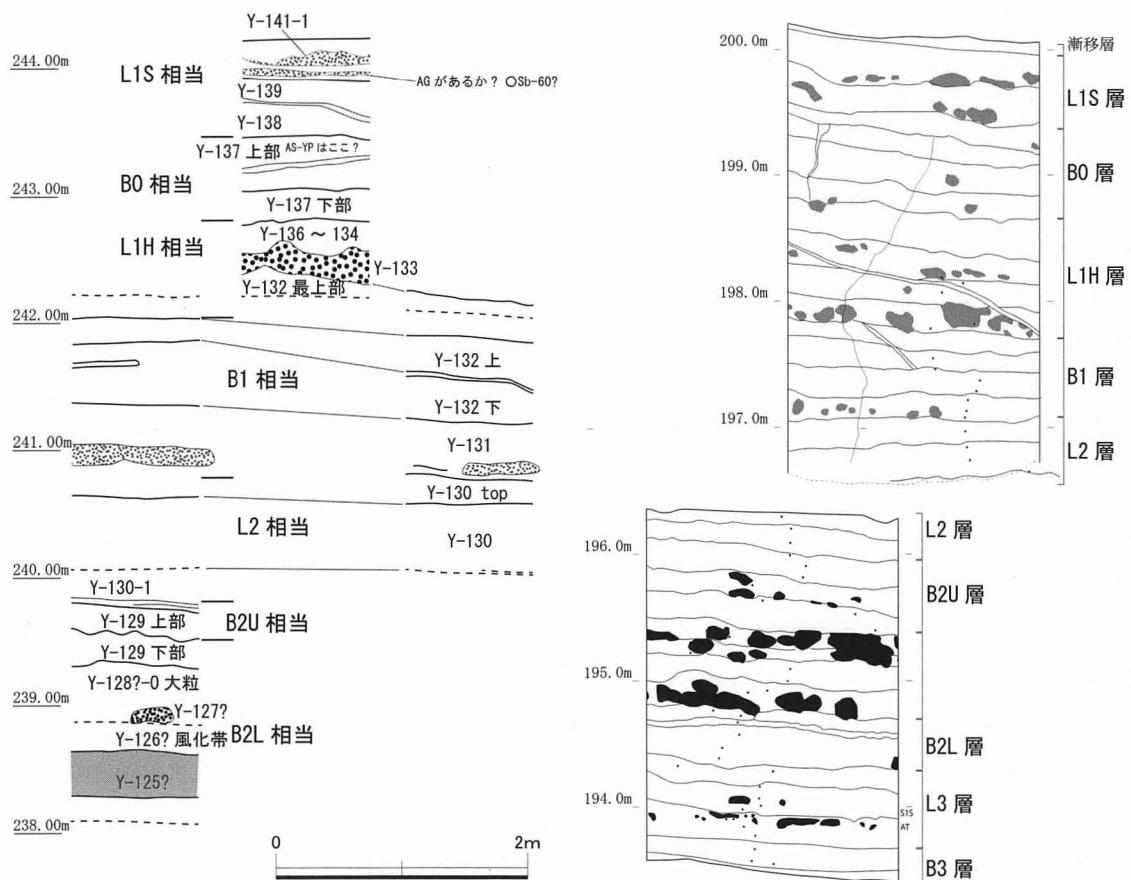
第6図

伊勢原市西富岡・
向畑遺跡の立川ロ
ーム層

6. 秦野市域のローム層序

横野山王原遺跡1区では、6 mまで掘り下げてローム層の観察を実施した。また、都留文科大学名誉教授上杉陽先生による火山灰分析を実施し、Yナンバーを付した。横野山王原遺跡では、土質や色調、および特徴的なスコリアを手がかりに相模野基本層序と対比し、相当層として分層している。また、寺山中丸遺跡の露頭では、中日本高速の本体工事に伴い、ローム層の良好な堆積が観察できた。以下で、両者の柱状図を併記し、横野山王原遺跡の調査から層位的な所見を述べる。

L1S相当層は、Y-141-1スコリア中にて層スベリが顕著であり、スベリ面を挟んで上部は固く締まっており、スベリ面より下層では締まりはあるものの粒子が粗くスコリア質となる。全体的に橙色を帯び、下部は赤色スコリア塊（Y-138）がみられる。B0相当層は、上部2枚が粘性の強い暗褐色土で、浅間山を給源とする板鼻黄色軽石（AS-YP）が混在する。L1H相当層中には、大粒の黒色スコリアが帯状に認められ、ここではY-133と捉えられたが、相模野台地のL1H層中に顕著なY-137-2である可能性も否めない。養毛小林遺跡では、この直下から槍先形尖頭器の石器群が出土している。B1相当層は1 m以上の層厚があり、Y-132～130最上部までのスコリアが捉えられ、色調は全体的に赤味がかった。アカゴマと捉えられた赤色スコリア塊をふくむのだろうか、ここではY-131とされた付近に密集する。この直下で、B1とL2相当層を分層する。L2相当層からは、大粒の岩片が顕著となり、B2L相当層上部くらいまで続く。横野山王原1区の最下層はB2L相当層の途中と捉えられ、Y-125?を含む暗色帯は大粒のスコリア質土層で、きわめて固く締まっていた。寺山中丸遺跡の露頭では、L3層中より白色粘質土のAT（始良丹沢火山灰）が確認されている。（畠中俊明）



第7図 横野山王原遺跡第1区（左）と寺山中丸遺跡露頭（右）の土層断面（1/60）

7. 層序区分のこれから

考古学の年代法は絶対的年代と相対的年代(濱田訳 1932)からなる。絶対的年代は近年の加速器質量分析(AMS)法が進展し、その測定値を暦年補正した較正年代が年々高精度化されている。さらに、三方五湖水月湖の73,000年分の年縞堆積は世界標準であり、AT降灰は西暦2017年で30,020年前となる(若狭三方縄文博物館編2014)。相対的年代は、地層累重の法則が基本となる。その嚆矢はニコラス・ステノによる350年も前に遡る1669年のことである(山田訳2004)。

日本における層位的発掘はマンローによる神奈川県三ツ沢貝塚における1905年のトレンチ調査に始まる(Munro, N. G1911 1971 復刻)。宝永火山灰覆土層の下位に黒色土、赤色土、貝殻混土層を観察しながら調査を実施している。日本人による層位的発掘調査はXⅧ層区分の里浜貝塚の調査から約100年(松本1919)を経過している。新潟県室谷洞窟の15層分層(中村1964)など、日本の貝塚・洞穴調査が層位的発掘調査を推進した背景でもある。

広域テフラの発見(町田・新井1976)以来、ローカルテフラとの併用によっても遺跡間層序対比の高精度化が進み火山灰考古学とも呼称されている。とりわけ相模野台地の発掘調査で普及したY(新規ローム)No.・S(須走)No. (上杉他1983)テフラは、相模川以西の大規模開発に伴う発掘調査においても層厚故の高分解能は層序対比の極めて有効な指標となっている。かつて、伊勢原市域は「立川ローム層」、秦野市東地区は「武蔵野ローム層以上」、西地区は「その他の第四紀火山砕屑物」であり、1,000ヶ所の柱状図から選択された地点は伊勢原市内が皆無、秦野市内は金目川流域4地点(関東ローム研究グループ1965)とは隔世の感がある。

YNo.は漸移層のY-141群、L1S層のY-139・138、B0層のY-137-4、L1H層上半部のY-137-2、BB1下位のY-132-1など、黒・橙・赤・茶のスコリア粒の大きさや密集度、岩片やパミスの分散等が分層の手立てとなりローカルテフラの真骨頂である。鉱物組成や火山ガラスの屈折率によってもその蓋然性は高まる。

しかし、開発に伴う偶発的な露頭の出現はやがて消滅し半永久的な露頭保存が叫ばれて久しいが、展示施設の剥取標本では心許ない。また、遺跡内の地形改変による遺構改変、火山灰廃棄遺構や津波堆積物(藤原2015)の検出など、所謂人類活動における災害痕跡の研究も進展している。遺跡調査における層すべりや断層、土層反転など分層時の記録保存のための観察の賜である。基本となる土層断面の精査は、移植ゴテから草刈鎌(小林1975)、「信州鎌」、片手捻りガマ、長柄草削り、草削り三角ホーなど身近な道具も変遷をたどる。

古富士から新富士にいたる10万年間に200回以上のテフラ噴火は旧石器時代の時間軸の指標としても500年/1テフラとなり、高精度化する絶対年代との協調によって石器文化編年のさらなる高精度化が期待されよう。水月湖の年縞堆積は7年以上地形変動していないという前提がある。その意味では200通りのテフラの共通性によって異なる地域を比較対照可能とする強みがある(遠藤2014)。浅間山起源のAs-BPすら新たな安中市横川大林露頭の発見による19層の区分(早田・下岡・岩井2016)は今後も予断を許さない。

BB1層上部からBB0層下部の最終氷期、続くBB0層から漸移層の最終退氷期初期、ヤンガードリアス期の寒の戻りが12,900年前の北米へ天体衝突など、ボンドサイクルをはじめとする惑星規模での気候変動が議論される。地質年代では77万年(～12万6千年)前の地磁気の逆転現象の明瞭な市原市田淵の露頭を「チバニアン」(千葉時代)の命名に国際地質科学連合に名乗りをあげ、イタリアとの雌雄は年明けにも決定する。

層序区分は極めて主観的な面もあるが、テフラNo.を付与することで客観的対比が可能となる。相模川以西の調査でも相模野基本層序の分層名を付与するが、隣接層序間は常に漸移的層序が介在する。遺跡形成過程の層序区分は常に人為自然為の侵食・堆積・擾乱等の土壌生成を念頭とした思考作業となる。(砂田佳弘)

おわりに

ローム層の堆積及び層序区分の把握は、旧石器時代調査・研究の基礎となるデータである。取り分け、相模野台地は、富士・箱根という供給源に近いことから、類似した厚いローム層が、ほぼ台地全体から観察される良好な地域である。このため、本台地の旧石器時代の調査成果は、旧石器時代の編年研究に大きな影響を与えてきた。しかし、神奈川県全体で旧石器時代の調査成果を確認してみると、この相模野台地以外、特に相模川以西エリアからは、旧石器時代遺跡の存在そのものがほとんど確認されていなかった。

ところが、近年、目まぐるしいスピードで発掘調査が展開されているこの地域において、旧石器時代の調査事例が増加している。この地域は、火山灰の供給源に更に近くなることから、相模野台地よりもローム層の堆積状況が厚くなる。しかし、大枠の中では、「〇〇相当層」という概念で相模野台地のローム層との比較検討が可能だと考えられる。層序は、「厚い」＝「良好」ではあるが、逆に厚すぎて、「〇〇相当層」という対比関係の確定が難しいという新たな課題も生じている。本地域のローム層の層序区分は、他の分析方法も含め、今後の資料・研究の蓄積が、新たな課題を相模野台地にも投げ返すかもしれず、今後の調査が楽しみな地域である。

(栗原伸好)

付記

2016年6月に第8回アジア旧石器協会(APA)日本大会が開催された。6月27日に大型バス1台で神奈川県内遺跡の巡検が実施された。当財団と事業者の協力によって秦野市寺山中丸遺跡の露頭、伊勢原市上粕屋・和田内遺跡の調査状況を見学した後、相模原市立旧石器ハテナ館の展示、国史跡田名向原遺跡旧石器時代住居跡、県内各時期の主要な石器資料の実見が行われた。参加者は、日本、中国、韓国、ロシア、モンゴル、インド、イギリス、フランス、ベルギー、アメリカの参加者40名である。

寺山中丸遺跡の露頭では、出土石器の観察と石器群の重層出土を説明し、海外参加者は日本の旧石器時代調査の現況を理解しているようであった。一方、海外参加者と日本人研究者間で、地層の成因や層序区分方法の認識の相違の発見もあった。また、発掘調査現場の徹底した安全対策に感嘆する声も聞かれ、SNSですかさず友人たちに送る様子もあった。さらに、中国からの参加者は、発掘調査従事者が毎日通勤していることに驚嘆する(野口2017)など、神奈川県内における旧石器時代遺跡調査の一端を各国研究者へ紹介できた意義ある一日であった。

(砂田佳弘)

引用・参考文献

- 麻生 優 1969 「「原位置」論序説」上代文化 38 pp. 1-5
- アレイ, R. B., 山崎淳訳 2004 『氷に刻まれた地球 11 万年の記憶—温暖化は氷河期を招く』 pp. 239
- 上杉陽・米澤宏・千葉達朗・宮地直道・森愼一 1983 「テフラからみた関東平野」アーバンクボタ 21 pp. 2-17
- 上本進二・上杉 陽 1996 「神奈川県のテフラ層と遺跡層序—考古学のためのY-no.・S-no. 分層マニュアル—」『関東の四紀』 20
- ウォーターズ, M. R., 熊井久雄・川辺孝幸監修, 松田順一郎, 高倉純, 出穂雅実, 別所秀高, 中沢祐一訳 2012 『ジオアーケオロジー: 地学にもとづく考古学』 pp. 326
- 遠藤邦彦 2014 『日本の沖積層—未来と過去を結ぶ最新の地層—』 pp. 415
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2016 『平成 27 年度横野山王原遺跡 新東名高速道路建設事業に伴う秦野市横野地区埋蔵文化財発掘調査既報』

- 公益財団法人かながわ考古学財団 2016 『平成 27 年度寺山中央遺跡 新東名高速道路建設事業に伴う秦野市寺山地区埋蔵文化財発掘調査既報』
- 川島雅人・大西雅也 2004 『武蔵台国分寺跡関連遺跡（武蔵台西地区）』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 149 集
- 関東ローム研究グループ 1965 『関東ローム—その起源と性状』 pp. 378
- 栗原伸好 1999 「層位論」『石器文化研究』7 石器文化研究会
- 小林達雄 1975 「層位論」日本の旧石器文化第 1 巻総論編 pp. 114-136
- 近藤真佐夫・水野順敏 1995 『鷲ヶ峰遺跡 北東地区 第 1 次調査報告書』日本窯業史研究報告第 50 冊
- 佐藤明生・鈴木啓介 1999 『長浜ノ上遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第 7 集
- 佐藤明生 2001 『打木原遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第 10 集
- 島立 桂 2003 『千原台ニュータウン X：市原市草刈遺跡（東部地区旧石器時代）』千葉県埋蔵文化財センター調査報告第 46 集
- 白石浩之・加藤千恵子 1996 『吉岡遺跡群 II』かながわ考古学財団調査報告 7
- ステノ, N、山田俊弘訳 2004 『プロドロムス—固体論』 pp. 208
- 砂田佳弘・縄野匡哉 1996 『吉岡遺跡群 I』かながわ考古学財団調査報告 6
- 早田勉・下岡順直・岩井明彦 2016 「浅間板鼻褐色軽石群に含まれる火山ガラスと斜方輝石の屈折率特性に関する新資料」岩宿フォーラム 2016/シンポジウム ナイフ形石器文化の発達期と変革期—浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群— pp. 15-19
- 田中英司・剣持和男他 1984 『住宅・都市整備公団 浦和南部地区 埋蔵文化財発掘調査報告 明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第 35 集
- 近野正幸・畠中俊明 2006 『明神台遺跡・明神台北遺跡』かながわ考古学財団調査報告 192
- 津南町教育委員会編 2016 『本ノ木遺跡第一次・第二次発掘調査報告書』 pp. 324
- 中村孝三郎 1964 『長岡市立博物館研究報告第 6 冊縄文早期室谷洞窟』 pp. 49
- 中村雄紀 2014 「関東地方における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』第 10 号
- 西井幸雄 2009 『清河寺前原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 366 集
- 野口 淳 2017 「最近のシンポジウムから第 8 回アジア旧石器協会日本大会」東京の遺跡 107 pp. 1206-1207
- 濱田耕作 1918 『京都帝国大学文学部考古学研究報告第 2 冊河内国府石器時代遺跡発掘報告』 pp. 48
- 林 謙作 1973 「層序区分—その現状と問題点—」物質文化 21 pp. 1-17
- 廣瀬有紀雄・乾 哲也他 1985 『矢指谷遺跡発掘調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 藤原 治 2015 『津波堆積物の科学』 pp. 283
- 松本彦七郎 1919 「宮古島里浜貝塚の分層的発掘成績」人類学雑誌 34-9 pp. 285-315
- 町田洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—」科学 46-6 pp. 339-347
- モース, E. S、近藤義郎・佐原真訳 1983 『大森貝塚付関連資料』 pp. 219
- モンテリウス, O、濱田耕作訳 1932 『考古学研究法』 pp. 162
- 若狭三方縄文博物館編 2014 『世界のものさし水月湖年縞』 pp. 64
- JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION 2016 EXCURSION GUIDE, PROGRAM AND ABSTRACTS OF THE 8TH MEETING OF THE ASIAN PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION pp. 87-108
- N. G. Munro 1911 1982 復刻『PREHISTORIC JAPAN』 pp. 680